

ある年末風景

首藤 静夫

盛り場の人声こゑ温し年の暮　　しずを

年賀状も書いた、大掃除の手伝いも終わった、体が空いた――。

盛り場でもうるつくか。歳末の街の風に当たりたい。江戸の昔ならとんでもないことで、どこでツケ取りに出くわすか知れない。思えばいい世の中だ。

若いころは暮になると盛り場の映画館やパチンコ屋をのぞき、最後は飲み屋でオダを上げていた。映画館では東映の任侠物や松竹の大衆物を見た。今日日の映画はやたら深刻だったりリアルだったりで、暮の盛り場の雰囲気ではない。

パチンコはややこしくなった。以前、ある機種で打っていたら、急に玉がじゃらじゃら出てきた。店員が大きな箱を持ってくるわ、台の端に何か挟むわで、事情が分らずパニックだ。それは大当たりの打ち止めだったのだが嬉しさより怖さが走った。以来、映画やパチンコから離れた。

残された楽しみは昼間からの酒だ。普段昼酒はしないが年末は特別である。客が空く午後の時間に寿司屋や飲み屋に行くこと喜ばれる。カウンターで亭主や女将に話しかけ、行く年を惜しんで盃を傾けるのはいいものだ。

今年は新宿界限をぶらついた。手頃な寿司屋が見つからない。飲み屋に入った。威勢の良いかけ声が気持ちいい。少し若向きの感じはあるがメニューはなかなかだ。店員に酒と二三品を注文する。ところが、店員君曰く、

「メニューの隅にあるQRコードをスマホで読み取って、そこからスマホ注文してください」

「だって君がそばに来たんだから、直接注文を聞いたらどうなの」

店員君は不承不承聞いて下がった。

似た経験が前にもあった。ある回転寿司屋である。注文はすべてタブレットで行う。ベルトには寿司が回っていない。タブレット注文するとベルトが動いて皿を運び、客の前で止まる。皿を取らないとベルトが次に回らないので他の客が困る。おちおち飲んでいられない。結局、いらっしやいと有難う以外は会話のない店だった。

盛り場の雰囲気味わう余地がまた狭くなった。